

「静かな竹藪」

—初稿—

2025/05/12

米俵

〈人物表〉

大植 裕子	(48)	主婦
大植 哲也	(53)	裕子の夫

1. 大植家・外観（早朝）

朝日が昇る前の薄暗い時間。
築50年以上の古民家がぽつんと建っている。
家の近くには鬱そうとした竹藪が広がっている。竹
藪の中は暗くジメツとしている。
それを隠すかのように静かに揺れる竹。

2. 大植家・室内（早朝）

古いながらも綺麗に整えられたダイニングキッチン。
竹で作られた籠には大きな筍がいくつも入っている。
大植裕子（48）、慣れた手つきで下処理をする。
筍をむく手元のアップ。ぐしゃっと筍がつぶれる。

× × ×

台所の窓から朝日が差し込む。裕子、料理を続けて
いる。

ダイニングテーブルには筍料理が並んでいる。

大植哲也（53）、スマホを操作しながら席につく。

裕子、哲也の方は見ずに、

裕子 「おはよう。今日も元気そうね」

筍を切る裕子の手元のアップ。

哲也、スマホを見ながら、

哲也 「ああ……」

裕子、食事の支度を終え、

裕子 「じゃあ、食べましょうか」

と、席につく。

哲也、スマホをふせて置き、何も言わずに食べ始め
る。裕子、丁寧に手を合わせて、

裕子 「いただきます」

哲也 「おっ、今年のは一段と美味しいな」

裕子 「土が良かったんでしょうね。今年は特に真っ直ぐ育ちま
したよ」

哲也、色々な料理に手をのばす。食べるのに夢中で
裕子の話は聞いていない。

裕子 「竹って、じっと根を張って、時が来たら一気に伸びるん

ですよね」

と、満面の笑みで続ける。

裕子、箸先をそろえる。

外から、竹が風に揺れる音がささやくように聞こえてくる。

哲也は気にもとめず、さらに料理を口に運ぶ。

哲也 「ん？ これは少しアクが強いかな？」

裕子 「ちょっとした実験で。今年は変えてみたんです」

哲也 「んー」

と、言いながら、何度も口に運ぶ。

哲也 「確かにクセになる味だな」

裕子 「沢山食べて下さい。まだありますから」

食べ続ける哲也。

裕子、嬉しそうに笑う。

突然、哲也の手が震えだす。

裕子、その様子を落ち着いた様子で見つめる。

哲也、体が硬直し、椅子から転げ落ちる。

裕子 「美味しいでしょう？」

と、笑いながら、ゆっくりと哲也に近づく。

哲也、裕子を睨み、何かを言いたげだが、口に入っていた食べ物がこぼれるだけ。

裕子、哲也を見下ろして、

裕子 「大好きな筍、こぼしたらダメじゃないですか」

と、不敵な笑みを浮かべる。

意識が遠のいていく哲也。

ブラックアウト。

3.

竹藪の中（朝）

薄っすらと日が入る程度の明るさ。湿った葉の上を虫が這っている。

口にテープを貼られ、大の字に寝かせられている哲也。

裕子、哲也を見下ろす。

哲也、ゆっくりと目を開ける。状況に気付いて、体

を動かそうとするが、動かない。

哲也 「あああうあうあ」

と、必死で声を出す。

裕子、満足そうに微笑む。

裕子 「丁度良かった」

哲也の手首を竹に結びつけながら、

裕子 「昔話でもしましょうか」

4.

回想

裕子の声 「むかしむかし、猫と暮らす女がいました。女は猫を愛し、猫も女を慕い、幸せに暮らしてありました」

古民家の縁側。裕子と猫、一緒にくつろいでいる。

猫に優しく微笑む裕子。穏やかで静かな時間。

裕子の声 「ある日、男がやってきて、猫の真似をしました。優しく鳴いて、心地よく体をすり寄せ——」

哲也、裕子の前で猫を優しく撫でる。裕子に微笑む。

哲也の服に猫の毛がついている。

裕子の声 「女は信用して扉を開けました」

二人で食卓に並ぶ。哲也、指輪を出す。

裕子の声 「けれどその男、牙を隠しておりました。女の部屋をあさり、言葉をちぎっては、別の火にくべました」

裕子の財布からお金を抜き取る哲也。

スマホ画面。女とのメッセージ。

哲也が女と一夜を過ごす姿。

裕子の声 「それだけではありませんでした。ある日、男は女の宝物を投げ捨てたのです」

哲也、猫の首根っこを乱暴につかんで歩いていく。

それを必死で止めようとする裕子。

哲也、裕子を蹴とばす。

哲也が竹藪の中へ猫を投げ捨てる。

裕子の声 「女は毎日探し続けました。でも、もう見つけることは出来ませんでした」

裕子が竹藪の中を探している姿。

疲れ切った様子で、家に帰ってくる。

それを見た哲也。笑いながら、
哲也 「平気だろ。あいつらは、外でも勝手に育つんだから」

5. 竹藪の中（朝）

裕子の怒りの表情。

裕子、哲也の足首の固定を最後にきつく結ぶ。

大の字の哲也の四肢がしっかりと竹に固定されている。哲也の荒い息遣い。

哲也、言葉にならない声を出す。

哲也 「あうあああうあうあ」

裕子、哲也を見下ろしながら、

裕子 「安心して下さいね。竹は勝手に育ちますから」

哲也、土から少し頭を出している竹の芽を確認する。
声を張り上げる。

裕子、無視して歩いていく。

6. 大植家・縁側（昼）

縁側に座る裕子。竹藪を眺めている。

竹が揺れる音だけが聞こえる。

裕子、スマホを手に取り、電話をかける。

裕子 「元気？ また食べにこない？ ……そう。今年はとても
いいのが取れたから」

笑顔だが、目が笑っていない裕子。

竹藪の方を見つめる。

竹が答えるように大きく揺れる。

7. 竹藪の中（早朝）

暗く湿った竹藪の中。

竹の若芽がゆっくりと湿った土から顔を出している。
真っ直ぐに伸びた竹。

朝日が入り、血が垂れる様についているのが分かる。

8. 竹藪（早朝）

朝日で照らされる竹藪。

静かに揺れる竹。

（おわり）